

本屋が閉店する前に

～ 閉店をテーマに本屋が綴る想い～



企画・編集
アトリエ風戸 平城 さやか

本屋が閉店する前に

企画・編集

アトリエ風戸

平城 さやか

Atelier
Fudo

目次

1	はじめに	
4	分岐点	アトリエ*ローゼンホルツ 佐藤真里
8	ポジティブな閉店	葉々社 小谷輝之
11	会社をサポートして陽のあたる場所にいる	バックバックブックス 宮里祐人
16	いま想うこと	サンブックス浜田山 木村晃
19	階段があつた	そぞろ書房(小窓舎) 黒澤千春
23	交わらない	つまずく本屋ホール 深澤元
26	閉店の日进行	gunni 渡辺愛知
28	【朗報!】閉店は不可能	そぞろ書房(小窓舎) 倉島一樹
31	閉店を意識しながら店を続けるということ	本屋BREAD&ROSES 鈴木祥司
35	赤い河	そぞろ書房(点滅社) ゴム製のユウヤ
39	はじまつたことのように、おわつたことを祝う	つまずく本屋ホール 吉田尚平
43	喧嘩はやめたい	そぞろ書房(点滅社) 屋良朝哉
46	執筆者紹介	
48	編集メモ	

もともと本好きというわけではなかったけど、小学生のとき学校の図書室で借りた江戸川乱歩の少年探偵シリーズにはまり古本屋で探し回ったことが記憶に残っている。そのなかでも『青銅の魔人』を読んだときのドキドキ感と興奮が脳に刻み込まれてしまっている、きつと挿絵による相乗効果もあったからだろう。でも、ほかの作品はよく覚えていないのが不思議でしようがない。中学のときは赤川次郎だったり、内田康夫なんかを読んでいた、まあ、親が読んでいたのでその流れで読んでた感じだけど。高校からバイトを始めたのを機にいろんな作家さんを読むようになった。なかでも宮城谷昌光の中国歴史小説にはまり、いまでも新刊が出ると嬉しくてしようがない。いまも好んで読むのはエンタメ色が濃いミステリーだったり歴史小説ばかりだ。漫画を読んだり、映画を観たりと同じように娯楽として読書を楽しんでいる。

たぶん自分は本好きというより本を売ることが好きなんだと思う。

自分が選んで仕入れた本を、お客さんが手に取ってくれるだけでも嬉しいし、あたりまえだけど買っていただけたらさらに嬉しい。そんな好きなことを生業としてるこ

とは本当に幸せなことだ。

そんな本屋業も気づいてみれば三十五年超え、親戚経営ということで流れのままに高校からアルバイトとして働きはじめ今に至ってしまった。

うちは二十坪ほどの売り場で、雑誌、コミック、児童書、学参、一般書、文庫、実用書などオールジャンルを扱う昔ながらの町の本屋だ。

当然売れ筋のベストセラーも少なからず置いてあるが、お客さんの嗜好に合わせてカタイ本と総称されるような人文系の本だったり、ひとり出版社などの本も意識して置くようにしている。その積み重ねによって自然と棚が構成されていった感じだ。

当たり前だけどお客さんのおかげで現在も営業を続けられている。本当に感謝しかない。

けれど、いつまでやっていけるのだろうかと不安も抱えているのも事実としてある。町の本屋の閉店話を耳にするたびに他人事ではないと実感する。つい最近も仲良くしていた近くの本屋が閉店した。正確には店舗を縮小して文具だけを扱い、本は外商のみにしたこと。町の本屋としての機能はなくなったということだ。閉店という決



断をするまでには色んな葛藤があっただろうと思うけど、ただただ残念でしょうがない。

うちもいつまでやっていけるんだろうか、閉店ということになったらどうすれば良いのだろうかと考えると不安でしょうがない。売り上げ減少、健康上など、どんな理由になるかは分らないけど、いずれ閉店という選択をしなければならぬときに確実にやってくる。いつかくる閉店に向かって、いまは出来ることを地道にやっていこう。

階段があった

そぞろ書房（小窓舎）

黒澤千春

アトリエ風戸さんの本に初めて出会ったのは、吉祥寺のイベント会場だった。
『わたしのすきな ふつうの本屋が閉店』。

タイトルに強くひきつけられた。同じように感じた方は多いと思うけれど、わたしにとってはちょっと特別な色合いも加わっていた。なぜならわたしは、まさにその街、吉祥寺の「ふつうの本屋」で働いていたことがあるからだ。

即決で本を購入し、ふと思いついた。そこから歩いて十分足らずのところにある、あの本屋に行ってみよう。

わたしが働いていたのは、デパートの九階にあった本屋だ。大学に入学してすぐにアルバイトを始めた。夜間部の学生だったので、毎日の授業は夕方から二コマ程度。かたやアルバイトは朝から夕方四時半までなので、大学よりもはるかに長い時間を本屋で過ごしていた。さらに卒業後の二年間は契約社員として居座り、合計六年間働いていた。

その本屋はまだあるけれど、わたしが働いていた店とは違う。十年ほど前、デパー

～執筆者紹介～

この執筆者紹介は自己紹介ではなく、編集の私が書く他己紹介になる。
S N S のプロフィール欄を見たら載っているような事が書かれている
紹介ページなんて、つまらない。
とにかく、魅力溢れる書店主さんばかりなのだ。
私というフィルターを通しての超個人的他己紹介だけど、少しでも、
その方の魅力が伝わるといいなと思う。
78という少ない文字数で、その魅力を表現するのは、とても大変で、
とても楽しい作業だった。
この原稿を書いていて、なんて素敵な方々が執筆してくれたんだろう、
と改めて、感謝の気持ちが湧いている。

(アトリエ風戸 / 平城さやか)

▼店舗所在地

- ・アトリエ*ローゼンホルツ
千葉県市川市真間2-12
- ・サンブックス浜田山
東京都杉並区浜田山3-30-5
- ・gururi
東京都台東区谷中2-5-14C
- ・そぞろ書房
東京都杉並区高円寺南
3-49-12 セブンハウス202
- ・つまずく本屋ホール
埼玉県川越市霞ヶ関北
4-22-13
- ・バックバックブックス
東京都世田谷区大原2-17-12
- ・本屋BREAD&ROSES
千葉県松戸市常盤平4-8-7
- ・葉々社
東京都大田区大森西
6-14-8-103

アトリエ*ローゼンホルツ 佐藤 真里

時々ぼろりと出てくる佐藤さんならではの表現が好き。それはまるで真珠が時間をかけて貝に育てられるように、佐藤さんの生きた年月と言葉が重なった時に生まれるもの。

gururi 渡辺 愛知

初対面で「昭和のかわいさ」について盛り上がり話し込んでしまった。お店の雑貨、実用書のセレクトも好き。渡辺さんの澄んだ声が聞きたくて、またお店に行きたくて。

サンブックス浜田山 木村 晃

木村さんが丹精込めて整える棚が好き。一箇所に置いて売れないければ返品、にはしたくないという思いから、日々本を並べ替えている。木村さんに売ってもらえる本は幸せだ。

そぞろ書房・小窓舎 倉島 一樹

こちらの気持ち、やりたい事を聞いてくれた上で、倉島さんの考えや好きなものを伝えてくれる。相談しながら物事を進めるとは、こういう事だと感じさせてくれる人。

そぞろ書房・小窓舎 黒澤 千春

言葉がきれいな人は心もきれいな人。国語の教材制作にも携わる黒澤さんが話す言葉は潤いに満ちている。黒澤さん私も児童文学と名探偵ボロが好き。

そぞろ書房・点滅社 ゴム製のユウヤ

やさしい人。でも創作や仕事においては良い意味で冷静な視点を持っている。漫画好きだけど話が考えられず漫画家になれなかった私は、漫画家のユウヤさんを尊敬している。

そぞろ書房・点滅社 屋良 朝哉

お互いブルーバーツ好き。それだけで通じ合える気がする。作っている本を通して繋がれる。そういう事を信じているから屋良さんも私も本を作る仕事をしているのだと思う。

つまずく本屋ホール 深澤 元

おっとりしているけど、本に対する情熱がすごくある人。吉田さんと深澤さんが話す「読んでいない本について堂々と語るラジオ」が好き。はじめ君っていい名前だなと思う。

つまずく本屋ホール 吉田 尚平

本屋、喫茶店、建築、デザイン、地域生活応援…やっている事で説明したくない。吉田さんは雲みたいな人。様々な事、様々な人と関わりながら自由に好きな形に変わる雲。

バックバックブックス 宮里 祐人

短い言葉で本の良さを伝えられる宮里さんはすごい。その本読んでみたいと思う事が多い。山も本も旅も音楽も映画も好きな宮里さんは心も身体も使って生きる人だと思う。

本屋BREAD&ROSES 鈴木 祥司

生きづらさを感じる人の為の本屋を。長年労働組合で働いてきた鈴木さんから生まれる発想。鈴木さんも私も、私達のご縁を繋いでくれた「やっつやっ」さんのお菓子が好き。

葉々社 小谷 輝之

関西のイントネーションでやさしく話す小谷さんの柔和な笑顔が好き。出版社、作家、読者、本屋、本に関わる人全体の事を常に考えている、広い視野と大きい心の持ち主。

イラスト : アトリエ風戸 平城さやか

制作協力 : 小窓舎 倉島一樹

校正協力 : 小窓舎 黒澤千春

企画・編集・校正 : アトリエ風戸 平城さやか

発行元 : アトリエ風戸ブックファーマシー

2024 年 9 月 7 日 初版発行